

堆 積 の 器 — 身体や時間のものさしとなる建築 —



設計主旨 建築 と ものさし

建築にはものさしがつきものである。

物質そのものの大きさを測る尺度はもちろんのこと、

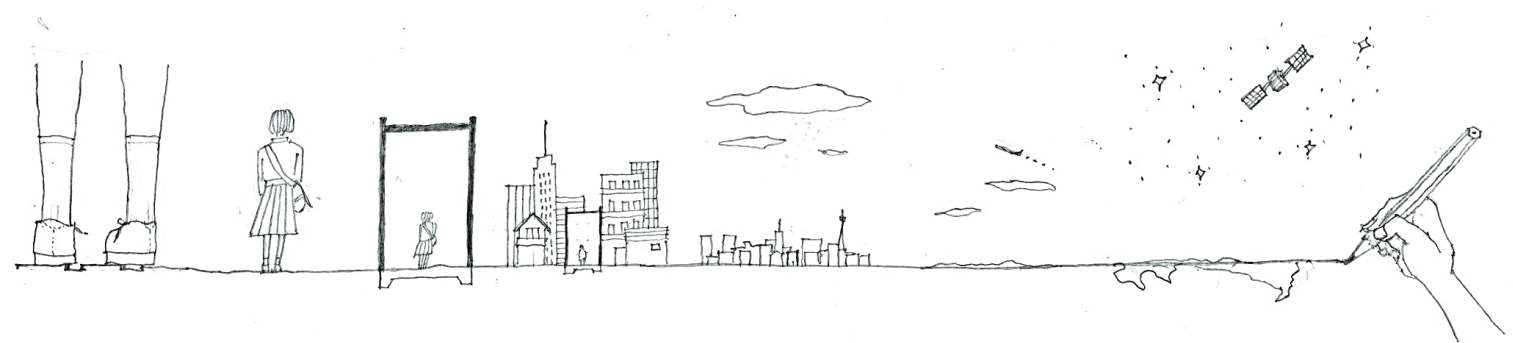
大地に根付く時間から、身体のものさし、

ときにはものの見方を変えてしまう価値観の尺度すら操作してしまう。

設計とはさまざまなものさしをもって、大地に建築する行為である。

建築のもつ地続きのスケールを行き来するような、

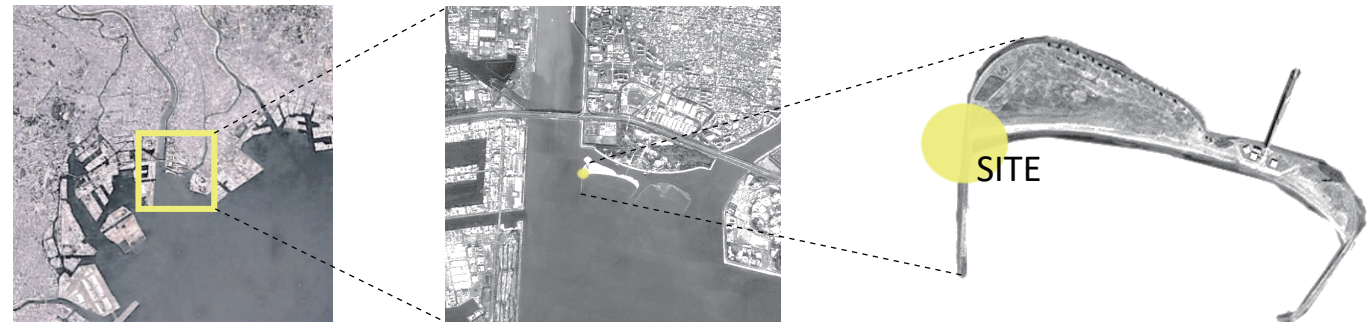
そしてそれが誰かの尺度をささやかに変えてしまうような建築を考える。



敷地 葛西海浜公園西なぎさ

荒川が東京湾へと注ぎ込む、水のスケールの境目となる場所

なぎさは一日のなかで潮の満ち引きを交えながら海と陸を行き来する



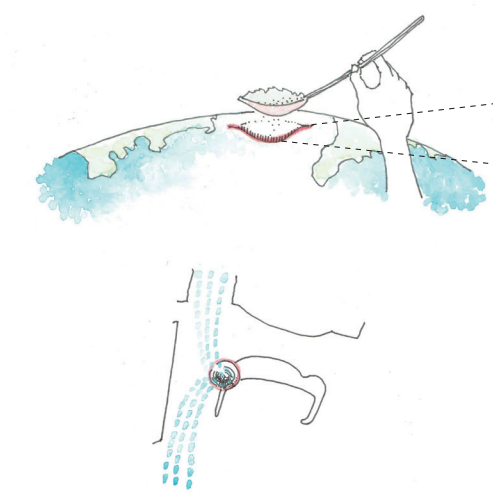
西なぎさにはたえず漂流物が流れつく

流れついた漂着物たちは人目のつかないなぎさの西方に貯められている

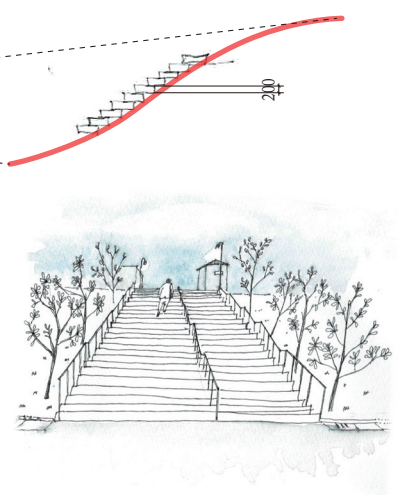


i 対象のスケール 建築が作用する対象の大きさ毎に解像度を変えながら設計する

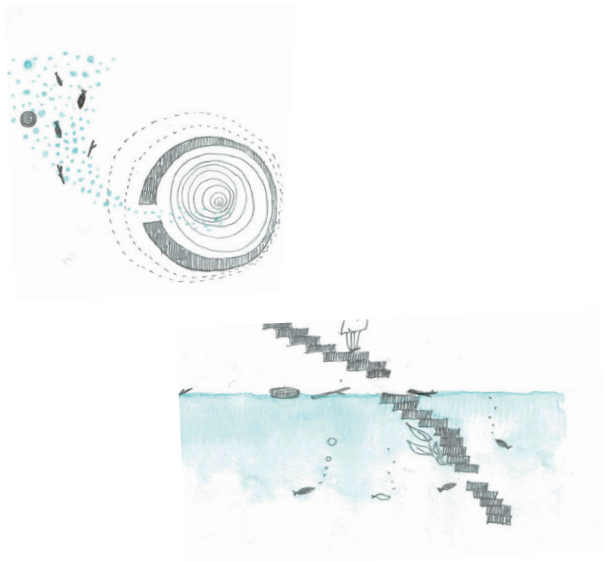
対 地球

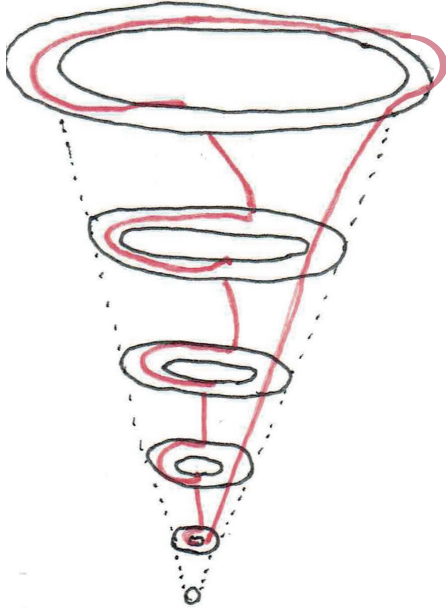


対 人間



対 魚 / 漂着物





地球

植物

人

魚

プランクトン

細菌

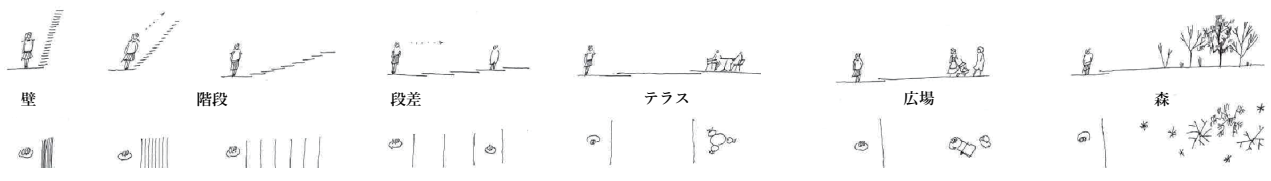
海水の流れを変えるくぼみを据える

くぼみを身体スケールに積分する

小さなモノ達の入り込む隙間をつくる

すり鉢に異なるスケールのモノや活動が内包される

ii 身体のスケール



垂直方向の勾配、水平方向の幅の操作で場を規定していく

iii 時間のスケール

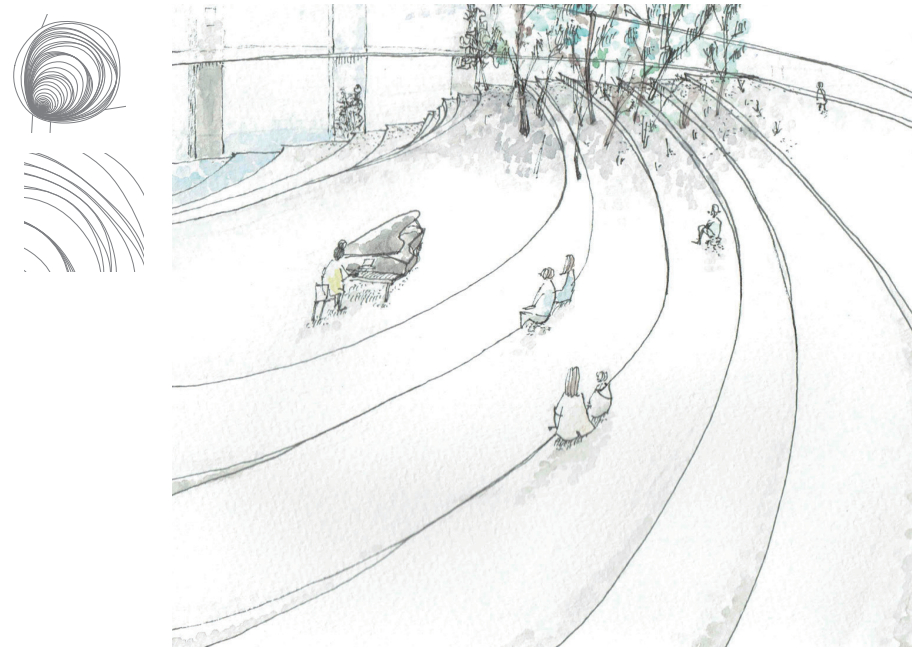
1 時間	1 日	1 年	100年	1000年
体験	潮汐	四季	海面上昇	腐敗

建築は大地に根差して環境の中で時間の経過とともにふるまいを変えていく

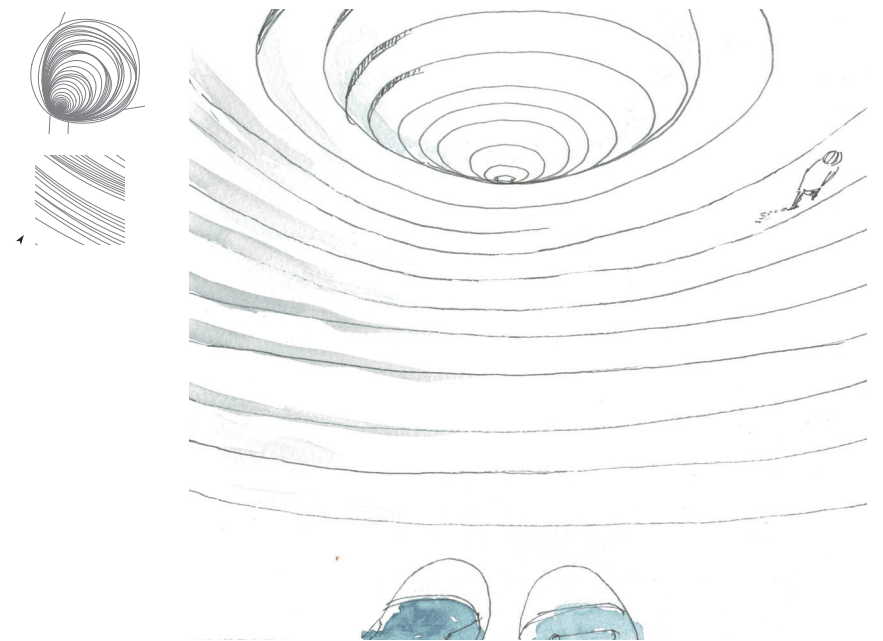
シーン



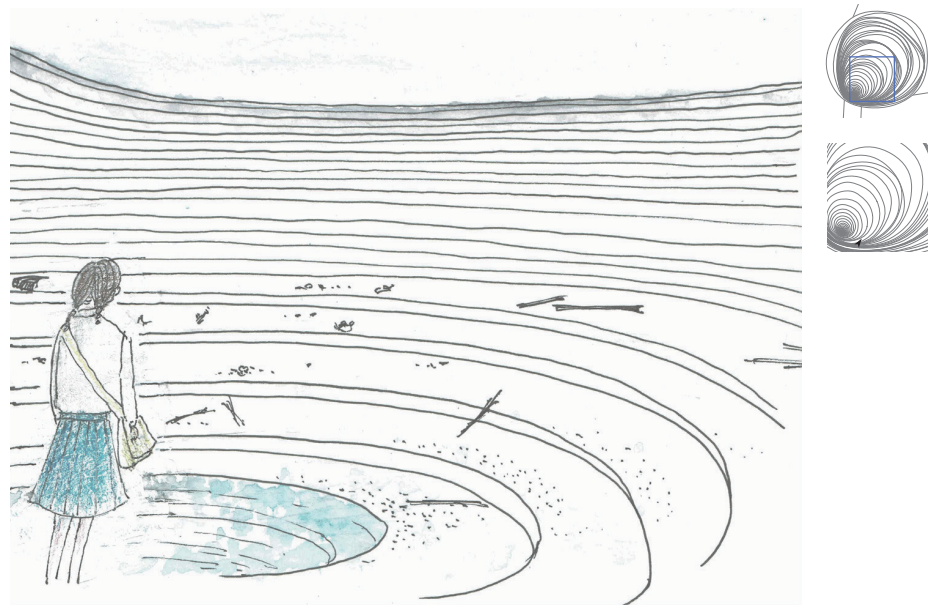
渚橋を渡り、少し歩くと遠くにすりばちが現れる



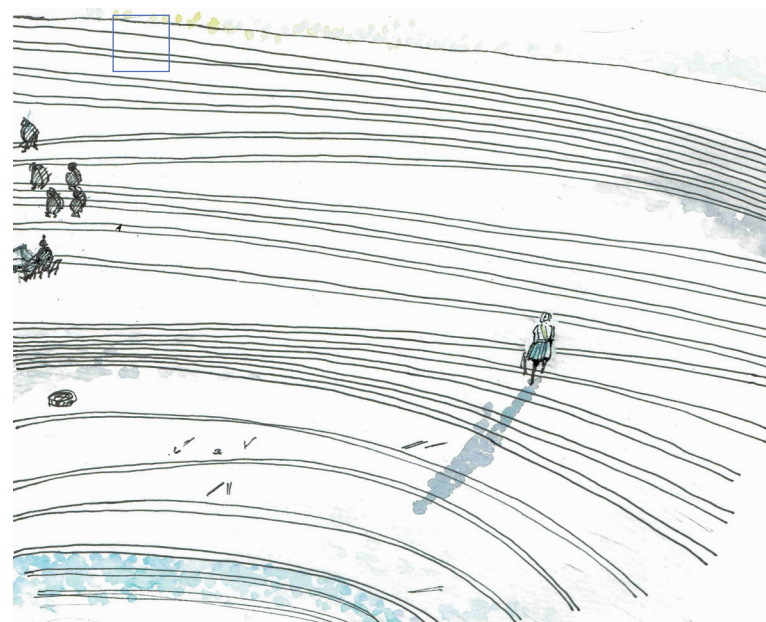
いつしかすりばちに入り込む 海を背景に音楽が演奏されている



あるところには階段のような場所がある



ふもとはには漂着物の堆積場が現れる



さまざまな活動を横目にしながら登っていく



すりばちを俯瞰しながらその場を後にする



L

L